



『約束のネバーランド』
—— 実写映画公開記念! ——

エマ役

原作

作画

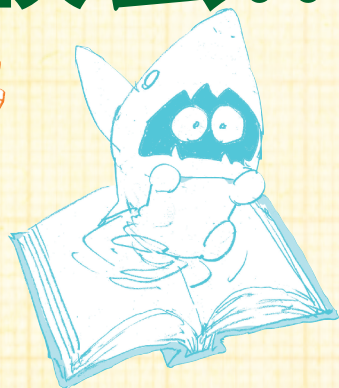
浜辺美波 × 白井カイウ × 出水ぽすか
スペシャル座談会!!



【浜辺美波】



【白井カイウ】



【出水ぽすか】

『約ネバ』を生み出した作家陣と、『約ネバ』が大好きだという実写映画でエマを演じる浜辺美波さんとの座談会が実現! 映画の話はもちろん、原作の話題も語っていただいた。

※インタビュー中に『約束のネバーランド』原作のネタバレがあります。

『約ネバ』の誕生

——浜辺さんは以前から『約ネバ』にはまっているとお話ししていましたが、どこに魅力を感じていましたか？

浜辺：最初は可愛らしい絵柄なのにダークな表現やグロテスクな部分が多いという、そのギャップに惹かれました。絶望的な展開が次々と訪れる中で、子供達がどうやって未来を切り拓いていくのかが気になりどんどんお話に引き込まれて、とにかく最後までこの子たちを見届けたいと思ったことが大きかったです。

白井：浜辺さんは単行本から入られたんですか？

浜辺：はい、私は単行本派です。1巻が発売された頃からずっと読んでいました！

白井：良かった！つかみはOKだったんですね(笑)。

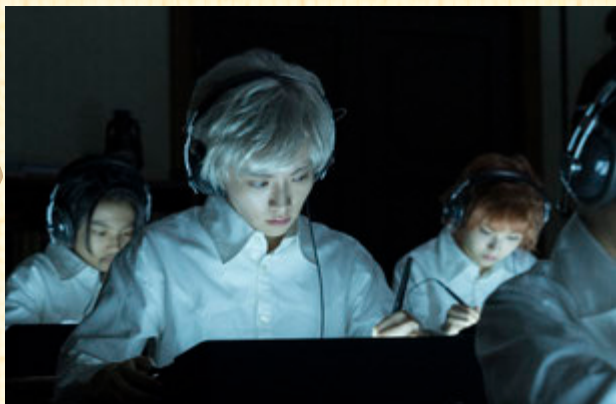
浜辺：はい、すっかりはまって最後まで毎巻買っていました(笑)。

——『約ネバ』はジャンプでは珍しい女性主人公ですが、ジャンプらしいテーマ(友情・努力・勝利)も詰まっていて、その絶妙なバランスが素晴らしい作品だと思います。白井先生はどのように物語を作っていたのですか？

白井：かなり前に原形になるようなお話を思いついたのですが、今よりももう少し社会派な感じで、ちゃんとエンタメするには難しいと思っていました。その後投稿者時代、そろそろこの道を諦めようとしていた頃にちょうど『幽☆遊☆白書』

のアニメを見る機会がありまして。魔界編で飛影が魔界に迷い込んだ人間を(人間界に)返してあげるといシーンで、不意に「私だったらそのまま神隠しとして養殖しちゃうのに優しいな」と思ったんです(笑)。その瞬間「もしかしたらあの時に考えた企画を使えるかもしれない」と色々なものが繋がって、そこから今の形が生まれました。元々、子供の頃にグリム童話や日本の童話など、人が食べられるような話がどこか染みついていて、そういったものの影響もあったと思います。





——出水先生が描かれたキャラクター達もとても魅力的でしたが、登場人物も多く連載中はかなり大変だったのでは？

出水：毎週毎週終わらないという苦労は凄くありましたが、いざ終わってみたらその時期の全てが懐かしくなっちゃいました。今では苦労した

ことも忘れて良い思い出に上書きされています(笑)。

浜辺：私、ノーマンが成長して出てきた時に「カッコいい！」ってとても感動したんです！

出水：良かったです！成長したノーマンは本当に苦労したんですよ。白井先生にもいっぱいご迷惑をおかけして…。

白井：いえいえ、こちらが出水先生に沢山ムチャ振りをしましたので。時間的には2年しか経っていないのに、ミネルヴァさんにミスリードさせたいからもっと成長させてほしいと。普通の子供の2年間以上の成長を求めたので。

浜辺：確かにノーマンはとっても大人っぽく成長していましたね。

出水：最初は誰が見ても13歳ってわかるくらいの成長した姿で描いてみたんです。そうしたら白井先生からもっと成長させてほしいと言われたので、だったら15歳くらいかなと想像して書いてみたら、もっともっと！って(笑)。

白井：1週間しかなかったのに、沢山お願いして3～4回描き直して頂きました。その節はありがとうございました。そしてすみませんでした…！

浜辺：でも成長が早い子もいますから、私は全然違和感がなかったです。凄くカッコよく成長してる！と思って嬉しかったくらい。

出水：そうですね、そのギャップがあったので読者の方にも注目して頂けたかなと思いますし、結果的に良かったです。それに浜辺さんにカッコいいって言ってもらえて嬉しいです！





——先生方はエマ・レイ・ノーマンたちのキャラクターデザインはどのように作られていったんですか？

出水：まずはとにかくいっぱい描く！ですね(笑)。

白井：原案だけでなく、雰囲気はこんな感じでという絵はお渡ししていたんですが、髪型やデザインは出水先生に自由に変えて頂いて構いませんとお伝えしていました。エマだったら、太陽のような子で、精神年齢は5歳、天真爛漫だけどおバカさんではなく

て、ボーイッシュだけどちゃんと女の子で……など色々な条件を挙げていました。最初はロングヘアやポニーテールなど色々なエマが生まれて、結局はショートカットに落ち着いたのですが、シルエットでわかるように触角がつかまりました。

浜辺：その色々なエマをぜひ見てみたいです。ちなみにハウスの子供達は全員、設定が細かく決まっていたんですか？

白井：エマ・レイ・ノーマンあたりは比較的設定を細かく決めていましたが、その他の子供達はそうでもないです。トーマやラニオンは出水先生のアドリブですね。トマトと玉ねぎをモチーフにあんなに印象的なキャラクターを作ってください。他にも命名して下さったキャラクターもいますし、脇の子供達は出水先生が細部を考えて作り出してくれた子も多かったです。

出水：ちょうど2016年頃だったんですけど、オリンピック選手名鑑とか眺めながら、なるべく色々な文化圏の子にしようと思っ名前やイラストを考えていました(笑)。

浜辺：フィルはどうやって生まれたんですか？私、フィル大好きなんです！あの口が可愛い！

白井：名前は決めていたのですが、キャラデザは出水先生に。あの口が特徴的なフィルを描いてくださって、それがとても可愛かったのでこれで！って。私はフィル推しなんです。

浜辺：私もです！本当にフィルって

可愛くて。実写のフィルも口元が似ているのでそこにも注目です！



——実写の子供達も出水先生のイラストと似ている子たちが沢山出てきますが、先生方は自分たちが生み出したキャラクターや世界観が実写化されているのを見てどうでしたか？

白井：トーマとラニオンに感動しました！実写なのでさすがに髪型とかは少し違うんですけど、食堂に飛び込んで入ってくる時の動き、雰囲気、表情、全てがとともトーマとラニオンだったんです。勿論、出演者の皆さん全員本当に素晴らしかったんですけど、まさかトーマとラニオンのシーンでこんなに感動するなんて自分でもびっくりしました（笑）。

出水：小道具など漫画で描いていない物まで沢山の用意してくださっていたのに感動しました。小道具って資料を探すだけでも大変なのですが、それを実際に集めてくるのって物凄い労力だったんだらうなって。あとライティングが素晴らしかったです。エマの髪の色とか、漫画の色になってしまうんじゃないかなって思っていたんですけど、ちゃんとリアルとして馴染む色になっていました。

浜辺：ライティングによって色味が結構違いましたよね。暗いと少しオレンジっぽいけど、外だと結構明るくて。

出水：そうですね、そのバランスにも感動しました。



実写映画化の動き出しと配役

——みなさん初めて映画化のお話を聞いた時はどんな感想をお持ちでした？

編集部・杉田：いくつかお話が来ていて、その中でも一番早く声をかけて下さったのが村瀬プロデューサーだったんです。まだ脱獄編も終わってない時期でしたし、アニメよりも早かったです。

浜辺：それはだいぶ早いですね(笑)。

杉田：かなり早い段階から平川監督と脚本家の後藤さんを連れてきてくれて。熱量がある人だから大丈夫だろうと思ったし、僕自身もやりたいと思ったので先生に話しました。改めて話すというよりは「こういう話来てますけど、やっていいですか？」みたいな感じでしたよね？

白井：そうでしたね。割と不確定な感じで(笑)。そうやって少しずつ情報を入れられていたので映画化するという第一報の衝撃って実は私はそんなに覚えがなくて。でも杉田さんが言うなら大丈夫だろうと思いましたし、もし実写化していただけるのであればとてもありがたいですし、誰がどう実写化するのかの方が大事だと思っていたので、全く抵抗もありませんでした。ちゃんと衝撃を受けたのはキャストさんが決まったと聞いた時でしたね。

出水：私は最初に白井先生のお話を読んだ時から凄く実写向きの作品だと感じていたので、アニメよりも先にお話に来るんじゃないかって思っていました。なので嬉しかったです。

——エマの配役やキャストを聞いた時はいかがでしたか？

白井：私は浜辺さんがエマを演じてくれると聞いて本当に嬉しかったです！嬉しかった上で、この前まで(「賭ケグルイ」の)蛇喰夢子だったのに！と驚きもしました(笑)。ふり幅が凄くなって。あの実写夢子のキャラクター



の掴み具合、表現、一読者としてめちゃくちゃ好きで感動していたので、めちゃくちゃ心強かったことを覚えています。原作を描いていて思うんですが、エマって好感度コントロールが凄く難しく、さじ加減を間違えると簡単に嫌われ者になってしまう恐れのあるキャラクターなんです。だから好感度の権化で、尚且つお芝居の力もある浜辺さんが演じてくださるなら安心だし大丈夫だと思っていました。少年っぽい少女感を出せるのも浜辺さんだからこそ魅力ですよ。

浜辺：好きだと言っているとその作品に関わるお話を頂けることが結構あって、本当にご縁に恵まれていてありがたいです。でも最初に実写化で、エマを演じさせていただくという話を聞いた時は驚きました(笑)。ある日マネージャーさんが原作だけ持ってきてくれて「今度これやります」と言われまして……。まずは「まさかエマじゃないですよ？」と聞きました。でも年齢的にママはないと思いましたが、他のどの役も合わなくて……。

白井：確かに原作だと浜辺さんの年齢に近い子はいないですね。

浜辺：そうなんです。なので、「これは、私がエマを演じるのか……」と。とにかくマネージャーさんに「ここはどう描くの?」「ここはどうなるの?」など沢山質問しました。本当に嬉しかったのですが、同時に物凄くプレッシャーも感じました。

出水：エマじゃなかったら誰だと思いました?

浜辺：映画ならではの新キャラを作るのかと思っていました(笑)。

一同爆笑

浜辺：ママとクローネの間に誰か作るのかなって(笑)。「まさか私、クローネやるのかな?」とも考えました(笑)。今は撮影が終わってから約1年が経ち、この1年間で顔や体型が変わってきたなと思うんです。18歳～19歳の頃って身体の作りや顔つきが変わりやすい時期だったので、完成した作品を観たら、なんだかみずみずしかったですね。

白井：いやいや、今でもとてもみずみずしいですよ!

——先生方は浜辺さんのエマを見てみていかがでしたか?

白井：圧倒的にエマでした!! 映画の最初の方でエマとノーマンが指切りをするシーンがあるのですが、その時のしぐさが完璧にエマなんです! あそこで女の子っぽさが出てしまっていたらエマじゃないなと思っていたんですが、抜群に少年的な指の切り方をしていて。最適解というか、原作にないシーンなのですが、原作で描いてもこう描くだろう、いや、原作でもここまでの最適解を入れられるだろうか、というくらい、これ以上ないお芝居を選び取ってくださっていて、浜辺さんやベェ!! ってなりましたし、本当最高のエマを作り上げてくださっていました!

浜辺：先生にそう言うただけだと嬉しいです!

白井：あのシーンは特に監督からの指示があったとかではなく?



浜辺：はい、自分の感じたままに演じました。だから先生にそう言っていただけで安心しました。原作をずっと読んでいて良かったです。

出水：浜辺さんがエマを演じると聞いた時、正直びっくりしたんです。個人的に、夢子のイメージが強かったのもありまして（笑）。でも、エマのセリフを話し出したら完全にエマなんですよ。役者さんって本当にすごいなって改めて思いました。

——キャスト陣も元々『約ネバ』が好きだったという方が多いのですが、エマ以外のキャラクターに関してはいかがでしたか？



白井：ノーマンにはビックリしました。板垣さんご本人にお会いするとキラキラした綺麗な方なので、演じ方次第では王子さまになってしまうかもとも思っていたんです。でもちゃんと“白馬”の方だったんですよ！個人的にはとても重要な部分だったので感動しましたし驚きました。

——実際に板垣さんは先生の発言を知っていて、それをずっと意識していたと話していました。

白井：そうなんですか！本当に細部までノーマンでした。杉田さんも指を使った数え方が完コピだ!!と感激していました。

——浜辺さんはノーマン役最終オーディションに立ち会われたんですよね？

浜辺：はい。どうしてもそのくらいの年齢の男の子って男臭さが出てくると思いますか、男子高校生っぽさを感じる子が多い中で、板垣君だけは見た目は勿論ですが世界観が少し違ったんです。目力も強いし、「この子だったらノーマンをどう演じるんだろう？」と気になりましたし、ビジュアル的にもきっとこの子なんだろうなと思いました。凄く不思議な子ですが（笑）、撮影中は沢山助けてもらいました。最初は大声を出したことがないと言っていか細い声だったのがどんどん力強くなって行って、最後までエマに寄り添ってくれました。



——城さん演じるレイはいかがでしょう？

白井：城さんだけ実年齢がかなり下だから、そのあたりとても難しかったんじゃないかなと思います。でも、この条件下でこの役を演じるというハードルの高さがまさまじに色々な物を背負いすぎているレイそのものですね（笑）。さらに実際にレイが背負っている業みたいなものもしっかりと表現されていて凄かったです！



出水：撮影後に声変わりをしたから全てアフレコし直したと聞いて、大変だったと思うんですけど凄く良くなったなと思いました。顔に対して声がしっかりしているし、爽やかな顔で低めの声を出しているのがとてもカッコよかったです。

浜辺：私も今の声の方がレイにあっているなと思いました。1年経ったかいがありましたね（笑）。

白井：あと、最初の食堂のシーンでエマとレイが掛け合いするシーンも良いですね。原作との身長差の違いとかは全く気にならなくて、凄く自然で、二人ともエマとレイになっていたのが素敵でした。

——クローネはいかがでしょう？



浜辺：現場中、私はまじめにやっていたのですが子供たちはずっと爆笑していました（笑）。特に城君がツボに入ってしまったみたいで笑いすぎて怒られていました（笑）。とにかく迫力がありましたね。

——出水先生のイラストとは違うはずなのに、クローネはこの人だ！って思わせるパワーが渡辺さんにはありますよね。

白井：渡辺さんのクローネは言葉にできない楽しさがありました。表情も素晴らしかった！

出水：渡辺さんがクローネを演じられると聞いた時から間違いなさだろうと思っていたんですけど、面白い以上に演技が良かったです。手のしぐさとかシスターならではの繊細さがありましたし、たくましさも表現されていて、ただの面白いキャラクターになっていないところが凄かったです。クローネの野心があるギラッとしたところも良かったです。渡辺さん自身、とても頭がいい方なので、そのスマートさがハウスでのし上がっていく力を秘めていそうだなと思いました（笑）。

白井：イザベラがクローネに資料を渡すシーンがあるんですけど、原作で作っておいて良かったなって思いました。あのシーンがあったから、北川さんが渡辺さんの頬をむぎゅってするシーンが出来たわけですから(笑)。



——北川さん演じるイザベラもピッタリですね。浜辺さんは北川さんと対峙するようなお芝居は初めてだったと思いますがいかがでしたか？

浜辺：特に凄いなと思ったのはノーマンの出荷が決まった後のママの一言なのですが、こちらのスイッチが一気に入ってしまうほど、怖かったです。優しいのにとっても怖い。もうあれは刺しに来てましたね(笑)。何回もグサグサと刺されているような気がしていました(笑)。北川さんにはとにかく沢山助けて頂きましたし、私の中でイメージしていた通りのママだった北川さんとだからこそ、“愛しているママが実は敵だった”という設定が自分の中にずっと入ってきたのだと思います。

白井：北川さん、本当にお美しいですね。ご自身が既にお美しいのに、イザベラとしての姿もさらにお美しくて……。門に近づいた犯人を捜しているところで壁の前に立つエマをのぞき込むイザベラというシーンがあるんですけど、あのシーンはまさに思い描いていた通りでした。全てのシーンで理想的なイザベラでしたし、特にラストのシーンが大好きです。ぜひ映画館で観てもらいたいですね。

出水：北川さんは顔を近づけた時の目力が凄い。実際にお会いしてお話しさせていただいた時に、少し顔が近づいて目が合うだけで怖いくらいに美しくて。美は魔力だと思いました(笑)。



浜辺：あまりにも綺麗すぎると怖いんですね(笑)。髪の毛をひっ詰めているからこそ余計に洗練されているといえますか、本当に凄いオーラでした。

緻密であり壮大！実写映画の撮影！！

——先生方は撮影現場を見学されていましたが、そのことで逆に原作に活きたことってありましたか？

出水：やはりライティングです。参考にしたいと思いました。多分、見学させていただいた後に描いた次のカラー画から影響が出ていたと思います。あとハウスの廊下や物置がある部屋など、とにかくスタジオの作りが凄くて！小さな小物であったり、本の背表紙であったり、とにかく参考になる物が多かったです。

白井：私は美術さんから「引き出しの中には何が入っているんですか？」と聞かれた質問が凄く心に残っています。映画では見せないけど、その世界に何があるのかを知りたいと質問して下さって。そこまで考えて頂けるなんてなんてありがたいんだろうと思いました。

——今作は、ロケーションも魅力の一つですね。

出水：本当にこんな風景や建物がよく存在したなと思います。

白井：ハウスの外観で存在しないところはCGで作ってくださっているのですが、すごいですよね。実写化のニュースが出てから、鬼も含めてCGは大丈夫なのかと聞かれることが結構あったんですけど、とても自然ですし、安心して欲しいです。全く違和感ないですから。

出水：キャストも日本人が多いはずなのに西洋感がしっかり出てましたね。浜辺さん演じるエマも海外の人かと思いましたし、本当に違和感がなかったです。見る人が見れば触角もわかると思います。でもあの触角は漫画だからシルエットでわかりやすくするために入れたのであって、絶対にあれがないといけないというわけではないので、全く気にならないです。

白井：映画は2時間で脱獄するまでをおさめなくてはいけないから、キャラクターの説明を細かくするのが難しかったので、エマやノーマンの髪色に関しても色で判別ができるから漫画に寄せるのも正解だったのかなと思います。年齢の設定に関して問題はないと思っていましたが、全く支障なかったです。



——鬼のビジュアルはいかがでした？

出水：こんなに深めて頂いて感動しました。実写で鬼をゼロから作り出すのは絶対に難しかったと思うんです。質感、動き、音など、とにかく細かく表現されていて、「鬼、本当にいるじゃん」って思いました(笑)。その裏には複雑な工程が沢山あったと思うんですけど、瞬きする一瞬のねっちょり感や充血感など、どこか魚っぽくていい具合に気持ち悪いなと(笑)。

浜辺：質感、凄かったですよね。ちゃんと怖いし少し気持ち悪いし、想像していた印象通りでした。目の動きは私も怖かったです。鬼に覗き込まれた時に目が合わずに変な方向を見る感じとか、とてもリアルでした。

出水：撮影中は鬼はいないわけじゃないですか。どうやって演じていたんですか？

浜辺：撮影前にVRでサイズ感だけ見せてもらったのですが、実際は張りぼてでした(笑)。出水先生の描かれた鬼をイメージしながら、こんなサイズで、これが迫ってくるんだと思うと自然と怖がるお芝居が出来ました。VRで事前に見せてもらうのは初めてでしたが、サイズ感がわかるだけでかなりやりやすくなりました。



白井：コニーの出荷シーンでトラックの下からエマとノーマンが鬼を見てしまって驚くじゃないですか。あの驚き方の違いも素晴らしかったです。エマは家族のことを考えているんだろうなと感じたし、ノーマンはあの一瞬で色々なことを考えているんだろうなと伝わってきました。二人のキャラクターの違いがあんな

——沢山素晴らしいシーンがありました。先生方の中でぜひスクリーンで一番観てもらいたいと思ったシーンは？



白井：すべてが素晴らしかったですけど、個人的には原作にはない映画ならではのシーンが2つあって、それが凄く良いのでぜひ観ていただきたいです。脚本の段階から素敵だなと思っていましたが、役者さんのお芝居がこれまた素晴らしくて、一層に良かったです！

出水：あのオリジナルシーンがあったからこそ、映画としてまとまりが出たと思います。

——映画もいよいよ公開間近ですが、最後にメッセージを。

白井：「とにかく観て！」としか言いようがないんですけど、『約束のネバーランド』のメディア化は、それぞれが同じだけ

違う、そこが面白いというところを目指している。その中で映画キャストの皆さんやスタッフの方々、本当に原作を大事に愛してくださっています。実写映画も、原作通りのところもある上で、オリジナルのシーンがかなり面白いものになっているので、ぜひ劇場で観ていただきたいです。

出水：原作を読んでくれていた人も、読んでことがない人も、どちらの方々も楽しめる仕上がりになっていると思います。美しいビジュアルと重厚なストーリーが絡み合っているので、大きなスクリーンで観て欲しいです。予告を観て気になった人は、絶対に観て欲しいですね！

浜辺：白井先生と出水先生のご協力があったからこそ、細かいところまで世界観を作り上げることが出来たんだと今日改めて思いました。ジャンプ読者の方々も勿論ですが、今の状況を打破したいと思っている方々にも楽しんでいただけたらと思いますし、少年心に戻ってエマ達と一緒にドキドキできる作品になっていると思いますので、壁を感じずに観て頂けたらと思います。





浜辺美波 はまべ みなみ

2000年8月29日生まれ、石川県出身。2011年に第7回「東宝シンデレラ」オーディションでニュージェネレーションに選ばれ、同年『浜辺美波～アリと恋文～』で映画主演を飾る。2017年には、『君の隣をたべたい』で第41回日本アカデミー賞新人俳優賞をはじめ数々の賞を受賞し、いま最も成長著しい若手女優の一人。

〈主な映画出演作〉『映画 賭ケグルイ』シリーズ(2019)、『屍人荘の殺人』(2019)、『思い、思われ、ふり、ふられ』(2020)

映画『約束のネバーランド』

12月18日より全国ロードショー!

出演…浜辺美波 城桧吏 板垣李光人 渡辺直美 北川景子

監督…平川雄一朗

脚本…後藤法子

原作…「約束のネバーランド」白井カイウ・出水ぽすか(集英社ジャンプコミックス刊)



その楽園から脱獄せよ。
私たちの未来のために。

約束の ネバーランド

12.18 [FRI]

「週刊少年ジャンプ」史上最も異色な脱獄ファンタジー、禁断の実写映画化!